

かけがえのない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

志 太 平 野



一
桑の実が色づく里

岡部町 廻り沢

編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）
撮影／村山正良（M2WORKS）
文／岡本 國治（岡本戦略広告事務所）

愛しき村、沢の流れる里。空があり、山があり、畑があり、お墓があり、そうして暮らしが引き継がれてきました。

国道一号线。宇津ノ谷トンネルを岡部側に抜けた少し先。最初の信号が「廻沢口」交差点です。日本の基幹道路であるこの道を、スピードを上げてただ通り抜けていくだけの車には、この脇の先に、小さな谷間の懐かしい山里と形容したいような村があり、堅実、丁寧な暮らしが今に引き継がれていることは、ちよつと想像できないことかもしれません。

途中下車する。“意志”を持って、ハンドルを切り、廻り沢の里に続く道に乗り入れると、またたく間に、右手左手に山並の頂きが迫り、切りは山間地の風情に一変します。茶畑と竹林の美しい緑に迎えられながら進んでいくと、すぐに民家が見え始め、公民館に達します。

ここが、およそ三〇戸の集落、廻り沢。

里の人によると、廻り沢には九十八の谷があるそうです。谷は、山と山にはさまれたいちばん低いところに水を潤沢に集め、その沢は名前のように、曲りく



沢の廻りに沿って、道も続きます。
川幅いっぱいに栗の木が広がり、6月は花満開の季節。

ねった急流となって走り、流れに寄り沿うように、民家の列。道は沢の片方に、沢と相似形の曲線を描きながら続いています。広げようのない道路事情。そのために、対向車と車がすれ違えるのは、公民館まで。その先は、気を付けながらゆっくり進むしかありません。

けれど、この道が狭いと感じるのは、車に乗っているからです。どこへ行くにも歩きしかなかった時代。人間や牛馬のサイズには、この幅で充分だったはずです。そんなに速くない昔のことなのに、人はせつせと歩くことがなくなって、何を失ったのでしょうか。いつの間にか、車の都合や車の速さで、道を判断するようになっていきます。

空の上から見下ろすと、見過ごされてしまうほど、狭い谷間かもしれません。でも実際に地上に立ってみると、土地はどこまでもひと続きであり、光も水も、緑も生き物たちも豊かにつながっている。ここにはすべてがある……。廻り沢に、延々と暮らしが営まれてきた理由がわかるような気がします。

家々の庭先や勝手口から、沢へと降りる石段が見えます。また、ある家の川岸の石段の上には、「水」の文字を型どりの瓦が鎮座しています。本来は、火事から家を守るためのもの。これを「水進入禁止」の祈りに使ったのは、家人の機転でしょう。水の恵みも怖さも知っている。そんな生活の匂い。

ただいまの季節が初夏であ



山の川は、すぐに暴れる。
あふれ水の侵入を“御免こうむる”祈りの瓦。

ることを教えてくれるのは、桑の実です。いたる場所に大木があつて、黒く熟する前の実は、ルビーのように赤く輝いて

います。童謡の「赤とんぼ」(三木露風作詞)は、「桑の実を小籠に摘んだはまぼろしか」と歌っています。蚕は飼わなくなっても、桑の木は残されたまま。里の人は、養蚕を営んでいた記憶を、まぼろしように、まだ消してしまいたくはないのかもしれません。

山あいの沢は、朝夕に霧を生み、いいお茶を育てます。廻り沢の現在の主な産業は、このお茶。そしてタケノコ、ミカン。いずれも山の斜面を働き場としているため、年齢を重ねてきた人たちにとっては、年ごとにきつい仕事になってきています。若い人は、街に働きに出ていきます。変わってゆく暮らし、変わってゆく集落。……でも、変わってゆくことが悪いことではありません。これまでも、時代とともに変わってきたのですから……。どう変わるかは、何を新しくして、何を残していくかの、選択の問題でもあります。

ただし、変わっていくのはゆっくりでいい。ゆっくり、ゆつくりが、ほんとうは何が大切かを教えてくれるのだと思います。この里の人たちは、これからも桑の木をずっと残していくのではないか。端正に手入れされた、静かな山里を歩いているうちに、こんなことを思っていました。



桑の実、森の宝石、赤いルビー。
真っ黒く熟してきたら食べ頃。森のデザートです。





























